

学校の「働き方改革」は、 何のため、だれのため？

総論

中教審答申の問題点と課題

中嶋 哲彦

愛知工業大学教授

期待外れの答申

文部科学省は二〇二三年六月、中央教育審議会（以下「中教審」）の初等中等教育分科会のなかに質の高い教師の確保特別部会（以下「特別部会」）を設置した。この特別部会は、「令和の日本型学校教育」を担う質の高い教師の確保のための環境整備に関する総合的な方策について」審議して方策を提言することを任務とし、二〇二三年六月二六日を皮切りに、二〇二四年七月二六日まで一四回の会合をオンラインで開催し、「令和の日本型学校教育」を担う質の高い教師の確保のための環境整備に関する総合的な方策について（答申）を取りまとめた。その後、二〇二四年八月二七日開催された中教審第一三九回総会は、文部科学大臣にこれを答申することを了承した。

答申取りまとめの最終段階の二〇二四年六月一四日から六月二八日まで、パブリッ

クコメントが実施された。これにはなんと一八三五
四件もの意見が寄せられた。意見の多さには、この
問題の深刻さと中教審答申への失望の大きさが現れ
ている。しかし、中教審は、答申の本筋に関わる事
柄については意見を一切取り入れなかった。

中教審は、文部科学大臣が所掌する重要事項につ
いて調査審議するための審議機関であり有識者等に
よって構成されている。しかし、実際には、中教審
の審議は文部科学省の官僚組織によってお膳立てさ
れた枠組みで進められ、答申案は官僚組織によって
作文される。委員の意見は官僚組織によって取捨選
択され、審議中に委員の発言動向がそのまま答申に
反映するわけではない。今回の答申もその例外では
ない。

教員不足の解消、教員の長時間勤務に向けた勤務
制度の改革、そして教員定数の抜本的改善を期待す
る声は大きかった。教職員だけでなく、全国知事会
などもそれらを政府に要請していた。それだけに、
答申に期待する声は少なくなかった。しかし、案の
定、それらは期待外れだった。

中教審答申の要点

「案の定、期待外れ」は矛盾を含んだ表現だ。しか
し、ここで「案の定」とは、この答申に関する審議
は元々『令和の日本型学校教育』を担う質の高い教
師の確保のための環境整備』を主題に始まったもの
であり、公立学校教員の長時間勤務の解消や教職員
定数の抜本的改善を目指すものではなかったのだか
ら、そもそも中教審に期待することはできなかった、
という意味。他方、「期待外れ」とは、「質の高い教
師の確保」を目指すと言うなら、教員の確保を難し
くしている原因を退治しなければならぬのだから、
誰が考えても公立学校教員の長時間勤務の解消や教
職員定数の抜本的改善に踏み込まないわけにはいか
なかったはずだ、という意味。

では、中教審はどのように考えているのか。中教
審は答申とともに公表した「中教審の考え方」とい
う文書で、「教職の魅力を向上させ、子供たちの教育
のために優れた教師を確保」するために、次の三つ
を「一体的・総合的に推進」すると言っている。